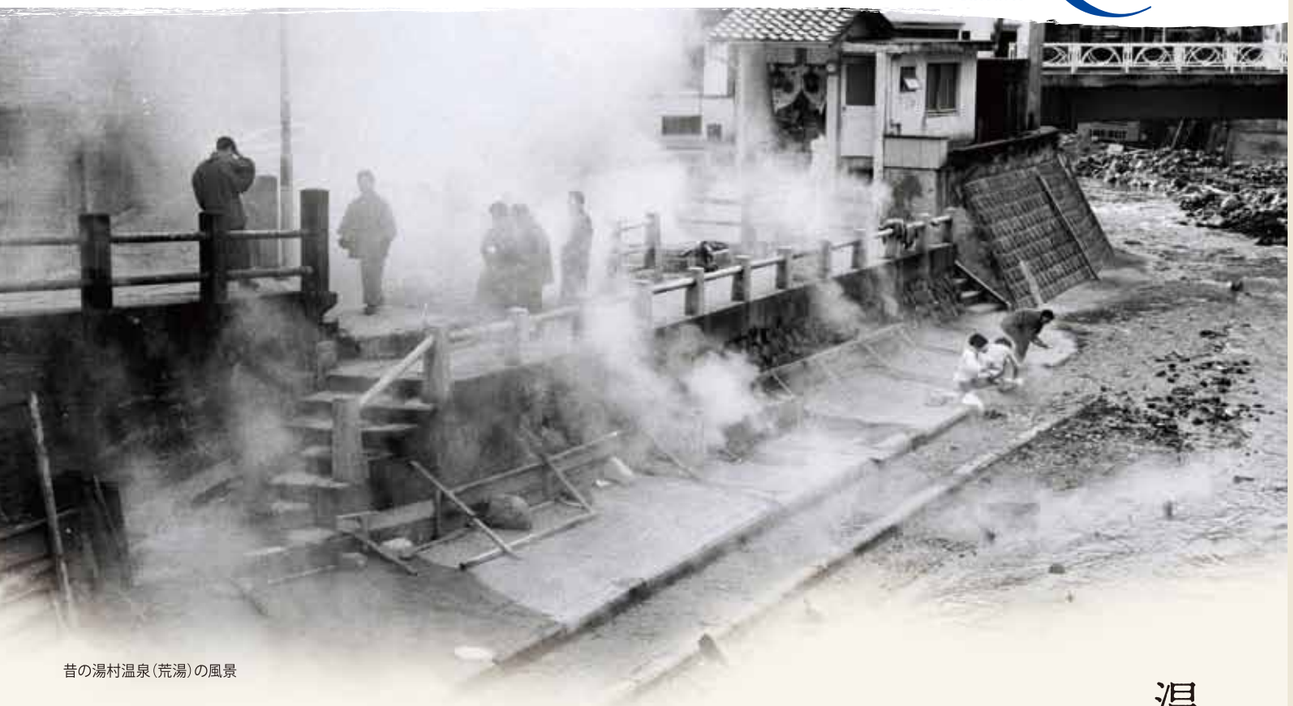
NEWS［ニューズ］ RRM Regional Resource Management



昔の湯村温泉（荒湯）の風景

温泉をめぐる物語

教授 中井 淳史

先日、研究科は新温泉町にて「温泉とまちづくり」というテーマで地域資源マネジメント教室を開催した。私はそこで、湯村温泉を含めた開湯伝承の話をする機会を得た。

開湯伝承とは、温泉の草創にまつわる伝承である。湯村温泉では、旅の老僧が指示した場所を住民が掘ると湯が湧き出したが、その老僧とは慈覚大師円仁であったという伝承がのこる。歴史学的にいえば、円仁が湯村を訪れた確実な史料はのこってはいないし、伝承そのものも江戸時代までしかさかのぼれない。書かれたことが事実か否かを峻別するところから出発する歴史学においては、この伝承は「取るに足らない」お話なのだ。

これで終わっては身も蓋もないので、全国の開湯伝承を収集した。時間の関係から温泉組合や旅館のホームページを参照した事例もあり、資料の裏付けにはまだまだ課題がのこるのだが、いくつか興味深い点がみえてきた。

開湯伝承は大きく二つのパターンに集約される。ひとつはある人物が温泉を発見、もしくは湧出させるものである。ある人物とは、行基や空海、円仁のように全国を巡歴したという僧侶が多い。かれらは住民の要請やもてなしに応えて、湯の湧き出る場所を指示したり、法力で湧出させた。もうひとつは、湯につかる動物の発見を端緒とするものである。コウノトリが湯につかっていたという城崎温泉の伝承はその典型だ。これら伝承の多くは発見の契機に神仏の夢告を介在させる。これは、温泉の治癒効果とは神仏のご利益と考えられていたからで、人物にせよ動物にせよ、神仏に連なり得る存在が開湯の主役となった。

江戸時代後期になると、知名度や効果？にしたがってつくった温泉番付が流行した。自由に旅行できたわけではない当時の人びとは、それぞれが抱える病気やケガにどの温泉が効くのかにつよい関心をもっていた。開湯伝承とは総じて、このようなニーズに応えてつくられたものであろう。

明治時代の記録をみてゆくと、温泉の化学的成分が強調されるようになった。炭酸水素ナトリウムや硫酸マグネシウムがどれくらい含まれる、といった情報だ。現代の私たちもそうではないかと思われるが、利用者の誰もが個々の医学的効果を熟知していたとは考えにくい。ことに科学的知識がほとんど共有されていなかった当時、こうした情報は神仏の冥助と大差なかったのではなかろうか。近代化する社会のもと、神仏にかわって、科学というあらたな衣をまとった物語があらわれたのだ。そして現代は、ホームページを調べた印象では美容をうたうものが圧倒的だ。開湯伝承から医学的効能、美容効果の宣伝という温泉をめぐる物語は、はからずも利用者が温泉に何を期待し、そして温泉地の人びとが何を売りにしたのかを浮き彫りにする。

伝承そのものの真偽を問うことはおそらく無益であろうが、それがどのように変化し、人びとに受容されたのかを問うことには十分に意味がある。温泉をめぐる物語とは、温泉につかる人びと、もてなす人びとが織りなした変奏曲であり、その点で時代の鑑であるからだ。

Information

山陰海岸ジオパーク 第3回みんなの発表会 Information 01

地域の自然・環境・文化に関心があり、それらを学び伝える活動をしているすべての人たちが集まり、情報交換や交流を深めることを目的として「第3回みんなの発表会」を開催します。多くの皆様のご参加をお待ちしております。

日　時: 令和2年2月9日 10:00～16:30
場　所: 豊岡稽古堂（〒668-0033 兵庫県豊岡市中央町２－４）
対　象: どなたでも参加できます

●申込み方法:1月30日（木）17:00までに以下（1）～（6）の必要事項をFAX:0796-22-5200またはe-mail:uhyogo.rrm@gmail.comへお送りください。

（1）代表者名と連絡先（住所のほか、電話番号やメールアドレスなど確実に連絡が取れる方法を教えてください）
（2）発表の有無（発表する、聴講・見学のみ）
（3）発表者（発表しない場合は参加者）全員の氏名と所属
（4）発表の題目、テーマ
（5）発表方法（①口頭発表 午前・午後の希望があればどちらか ②ポスター発表）
（6）②ポスター発表の場合、必要な展示ボード数

※発表者の数により口頭発表からポスターへ、またはその逆に変更をお願いする場合がありますのでご了承ください。

主催:兵庫県立コウノトリの郷公園
共催:山陰海岸ジオパーク推進協議会・
　　兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科

博士前期課程C日程入試 博士後期課程第2回入試 Information 02

博士前期課程C日程入試（全日程をあわせて定員12名）および博士後期課程第2回入試（全日程を合わせて定員2名）を令和2年3月1日（日）に実施いたします。試験は専門試験（小論文）と口述試験で、会場は豊岡ジオ・コウノトリキャンパス（豊岡会場）と神戸商科キャンパス（神戸会場）から選べます。

入 試 日 : 令和2年3月1日（日）
願書受付: 令和2年2月5日（水）～2月18日（火）

※事前に受験資格審査が必要な場合は、令和2年1月19日（日）～2月1日（土）に審査書類をご提出ください。

兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科 大学院生による研究報告会 Information 03

本研究科での研究成果をみなさんに知っていただくため、大学院生による研究報告会を実施します。興味のあるかたならどなたでもご参加いただけます。ぜひお越しください。

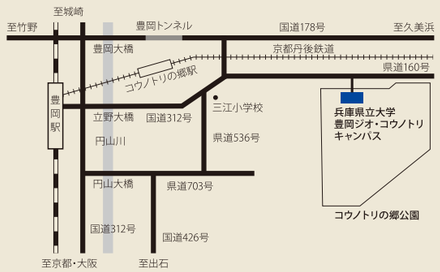
日　時: 令和2年3月15日（日）13:00～17:00（開場12:30）
開　場: 豊岡稽古堂交流室
　　（豊岡市役所敷地内、大開通り正面:豊岡市中央町2-4）
内　容: 分野別発表、パネルディスカッション
参加費: 無料

申し込み方法: Tel 0796-34-6079へ電話連絡もしくは氏名、住所、連絡先電話番号を記載の上、「研究報告会参加希望」と明記しメール（rrm@ofc.u-hyogo.ac.jp）またはFax（0796-22-5200）にてお申し込みください。

事前申し込み締切日:令和2年3月8日（日）
※参加希望者多数の場合は先着100名までとします。
※定員に満たない場合は当日まで受け付けます。

［お問い合わせ］各催しの詳細はウェブサイトをご覧ください。あるいはメール、電話にてお気軽にお問い合わせください。

兵庫県立大学大学院
地域資源マネジメント研究科 RRM
〒668-0814 豊岡市祥雲寺128
（兵庫県立コウノトリの郷公園内）
兵庫県立大学豊岡ジオ・コウノトリキャンパス
Tel. 0796-34-6079 Fax. 0796-22-5200
E-Mail: rrm@ofc.u-hyogo.ac.jp
http://www.u-hyogo.ac.jp/rrm/



写真提供

猪坂悦司:昔の湯村温泉（荒湯）の風景
原口強:可視化された密林下の古代都市
牧野厚史:調査地の阿蘇にて
公益財団法人但馬ふるさとづくり協会:寺内ざんざか踊り（朝来市和田山町）
長濱聖:講義「地域資源とツーリズム」での一コマ

UNIVERSITY OF HYOGO

発行:2019年 12月

災害の可視化

原口　強（大阪市立大学）

人は地震や津波では決して死ぬことはない。地震や津波は自然現象です。そこに人が住んでいるがゆえに災害になるのです。日本では「災害」と一括りにされますが、英語ではナチュラル・ハザードとナチュラル・ディザスターに分かれます。地震を例にとると、兵庫県南部地震、東北地方太平洋沖地震がナチュラル・ディザスター、阪神・淡路大震災、東日本大震災がナチュラル・ディザスターにあたります。自然現象の地震と、地震による災害とを明確に分けて考えます。メディアも混同しているように思います。

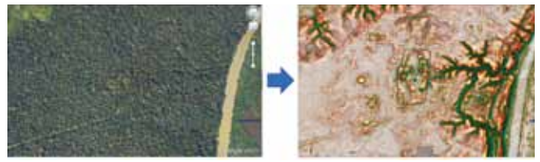
自然災害に対する防災の基本は、まずはその土地の成り立ちを知ることです。土地の成り立ちからハザードを知って、世代を超えて語り継ぐことが重要です。このことが防災意識を高めることになります。

頻繁に車が走行している高速道路を横切る人なんていません。車が見えるし、音もするからです。災害後に現場に行ってみると、人々が目隠しと耳栓をした状態で生活していたんじゃないかと思ってしまいます。危機が迫る中、ナチュラル・ハザードが見えていないか、敢えて見ない状態で生活しているかもしれません。

東北地方太平洋沖地震の時、三陸沖のGPS波浪計で津波が記録されていました。津波の高さは、6m。運用開始前でほとんどの人がこれを知りませんでした。もし沖合の津波情報がすぐに沿岸に住む人々に伝わっていたら、命を失わずに済んだはずです。これは情報の可視化の一つです。

災害から身を守るにはハザードから逃れることが重要です。それにはハザードが容易に見えること。見えるだけではなく、観察・診断し避難行動ができることが重要。これには、リテラシー（読み書き能力）教育が必要です。

今、自然災害が頻発している時代に私たちは生きています。これを生き抜くには、ハザードを理解した避難行動で、ディザスターを防ぐことです。このためにも、ナチュラル・ハザードの可視化が重要です。



Lidarと赤色立体図で可視化された密林下の古代都市

地方の水の使い方から日本の水問題を考える

牧野　厚史（熊本大学大学院人文社会科学研究部）

タイトルでは地方の水の使い方としましたが、地方とは、実際には熊本県のことです。その熊本県の人びとの水の使い方から、日本の水の問題を考えてみようというのが、サイエンスカフェでの話の趣旨でした。熊本県の人びとの水の使い方にみられる際だった特色の一つは、2016年の震災時にも役だった、湧き水との関係にあります。水道普及率がある程度高くても、飲料水として使える湧き水を維持しているコミュニティが、農村部を中心に多数あります。たとえば、阿蘇の火山のカルデラ内に位置する南阿蘇村は、水道はかなり普及していますが、そのまま飲める湧き水をもつコミュニティが多く、湧き水は村の観光資源の一つにもなっています。

多くの地域では、水道の水の普及とともに、コミュニティの水源、たとえば小さな河川や井戸、湧き水などが使用されなくなります。その結果、コミュニティ組織が行っていた水への監視が緩んで、水場が荒廃するケースが多かったといわれています。これが、人びとの行動のレベルで観察されてきた、水と人びととの関係の疎遠化の内容です。

もちろん、熊本県でも、この疎遠化に近いケースはあります。特に、熊本市や熊本県が危機感を持っているのは、硝酸性窒素による井戸や湧き水汚染の広がりです。

ただ、阿蘇地域に限ってみると、硝酸性窒素によって飲用に適さないほど汚染された湧き水はありません。その理由の一つは、雨水が浸透する涵養域の大半が牧野組合の管理する牧野になっており、コモンズ（みんなのもの）として管理されていて、開発されにくいことがあります。さらに、重要な理由の一つに、水源となる湧き水を管理する組織が現在も維持されている点です。集落の人びとによると、湧き水の管理を行うのは、そこに水神がいるからということになりますが、私たちからみると、集まって手入れをする組織が健在であることに大きな意味がありそうです。それは、水道の水が普及しているにもかかわらず、湧き水が飲める水でありつづけていることと深く関連すると考えられます。

このような熊本県阿蘇地域の人びとの水との関わり方から、何が学べるのでしょうか。それは、水と関わる理由が〈心の習慣〉として人びとの側にある限り、水道の水が普及しても、地域の水を健全に保つ方法がありそうだ、という点です。地域の水に人びとが関わる理由は、地方ごと、コミュニティごとに多様なので、ひとまとめにして、水と関わる文化、すなわち水文化と呼んでよいように思います。

調査地の阿蘇にて

RRM Introduction

修了生 在学生 から

地域資源マネジメント研究科同窓会
〝円山会〟の今後の活動に向けて

地域資源マネジメント研究科同窓会（円山会）会長（2017年3月修了）
小田垣　聡（豊岡市役所／NPO法人地域再生研究センター）

現在円山会は、16人の会員で構成しており、不定期で親睦や近況報告を図る機会を持っています。

先日、ある会員が「院生の時は、学術的な内容を一般市民にもわかりやすく説明するトレーニングをやってきた。そういうことが今役に立っている」と言っていました。研究科の教育方針は『新たな学問分野としての地域資源マネジメントに資する専門的職業人（一部は研究者）を育成することを目的とし、そのために3段階のカリキュラム体系、①地域資源マネジメントの土台作り「基礎科目」、②方法論と実践能力を培う「共通演習科目」、③分野を越えた構造的な理解力を培う「専門科目」』になっています（研究科HPより一部引用）。

院生だった当時を振り返ると、研究科の授業は一般的な講義のほかに、研究に関わるプレゼンテーションやポスター発表について、その専門分野を知らない人や一般市民にもわかりやすい表現方法で伝える授業が幾度となくありました。多くの同窓生は研究とは違う道に進んでいますが、先の会員の発言からもわかるように研究科で学んだことは今なお同窓生たちの中に息づいています。

ところで現在私は、住民自治にかかわる業務に携わっていますが、人口減少や高齢化により住民自治運営が困難となり、「その解決に向けた手がかりを見いだしたい」という多くの住民の声を耳にしています。地域情勢の変化から、そこに住む人たちだけでは課題解決ができない場合もみられ、このことは住民自治のみならず、自然や文化の保全も含めて様々な外部人材がともに手を取り合い、課題解決につなげていく必要性の表れだと考えています。

今後の円山会の活動として、先に記したような研究科で学んだことや考えのもと、地域の自然、社会、文化について発信したり、地域課題について地域が解決していく示唆を得るために、研究科や関係機関へつないだりする役割を担いたいと模索しているところです。会員が集まる機会が少ないなか、出来ることも限られていますが、研究科とともに今後も地域と向き合ってまいります。

最後に地域資源マネジメント研究科のさらなる発展と同窓生の皆さんのご活躍とご健勝を祈念申し上げます。

寺内ざんざか踊り（朝来市和田山町）
公益財団法人但馬ふるさとづくり協会提供

院生会だより
「2020年度の院生会の活動に向けて」

2019年度院生会会長
長濵　聖（博士前期課程1年）

大学院で学習、研究を基礎とする学生生活を送るうえで、在籍する院生のみなさんには大学院に対する様々な要望があると思います。しかし、個人的な訴えによって要望の実現を目指すのは困難です。そこで、院生会が主体となり要望を書面にまとめ、「要望書」の作成を行い、院生の総意として大学院に訴えかけることで大学院の学習、研究に必要な品質や環境の継続的な改善を行っております。今年度入学の博士前期課程生は院生会の運営を担う会長、副会長、会計職、ならびに実働を担う親睦部、広報情報部、会計監査に属しております。本年度は、院生のみなさまへアンケート調査および聞き取り調査を行い、院生会として9月に要望書を提出しました。結果は大学の構内に掲示しておりますので、興味のある方はぜひご覧ください。

さて、2019年度院生会では全院生ならびに全教職員のみなさまにもご参加いただける親睦会を2020年1月に企画しました。各専攻に所属する院生同士や教職員がより良い関係を構築することを目的としております。平日での開催となりますが、この場を通して新しい化学反応が起きることも期待しております。化学反応というひとつの言葉で書きましたが、実はその現象は奥深いものです。熱を加えないと反応が進んでくれなかったり、逆に熱を発して勝手に反応が進むこともあります。さらに、冷却し続けないと自らが分解・崩壊するといった注意が必要な場合もあります。これを研究活動へ置き換えると、教員による研究指導や職員による学習・生活支援はまさに院生に熱を与えるものです。また、研究に没頭する姿勢は自ら熱を発しているともいえますし、研究から離れゼミ仲間や友人などと過ごす趣味や旅行の時間は頭・身体・心をリフレッシュする自身の冷却につながります。この機会により多くのみなさまのご参加をお待ちしております。

次年度に向けた新たな取り組みとして、すべての院生の研究内容や個々に興味や関心のある内容について紹介する冊子の作成を行います。これは「地形・地質（ジオ）、生態・環境（エコ）、歴史・社会（ソシオ）」のつながりを強化し、分野を横断した意見交換や交流促進を目指すための新たな取り組みとなります。院生会の活動を通じて、みなさまの関係が深まり、新しい価値の共創を演出できるよう計画を進めてまいります。

そのほか、地域在住の子どもから大人までの様々な関係者を対象としたサイエンスカフェや夏休みの自由研究の支援など、地域に根差した活動も行う予定です。教職員、院生のみなさま、ぜひ、今後の院生会の活動にご期待ください。

講義「地域資源とツーリズム」での一コマ